

鮎屋の女房

井口昭久

桜が散る頃になると、大学の構内は明るい顔をした新人生であふれるようになる。出会いの時である。

私は初対面の印象が悪いらしい。私の顔は何も細工しないと、不機嫌な顔であるようだ。愛想笑いの細工をすると気持ちの悪い顔になるらしい。

初対面の人は、私の顔を見ると緊張する。その相手の顔を見て私も緊張する。その顔を見た相手はもっと緊張する、という悪循環が始まる。初めは相手の目をみることができない。目を見て話せないのは、「愛している」と誤解されるのを恐れているのではなく、相

手を信用していないからである。私は初対面の人を信用できない。

中学生であった息子が地下鉄で離れた席に座った。私は身を乗り出して手を振った。「パパだよ」。嫌がって無視するので大きな声で「親子だろう！」と言った。それ以来長男は私と外出しなくなった。私は見た目も悪いらしい。

学生時代、「あの不機嫌な井口君が嬉しうに歯茎を見せて笑うのが、私は好き」と、言ってくれた同級生の女子が一人だけいた。遊園地のジェットコースターや、滝を落ちる水を見て喜ぶのは、落差の激しさが快感だか

らである。

動物の初対面は緊張するようになっていく。弱い動物が、ライオンに突然出会うと必死で逃走するか立ち向かうか、瞬時に判断しなければならぬ。その時に出るのが、アドレナリンである。交感神経系が活性化される。初対面はストレスなのだ。

生後間もない孫の、薄ぼんやりとしていた視界が輪郭を現し始めたときに、最初に見えるライオンが私らしい。私には孫が4人いるが、どの孫も生後数カ月は私を見ると泣き続けた。たたかうことも逃げることもできない孫たちは、ただ泣くだけであった。

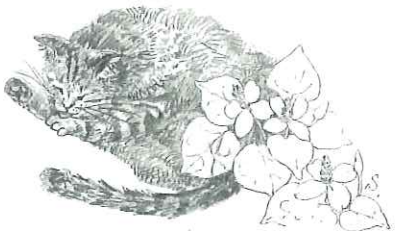
私の文章を読んだ友人の妻が、私に会ってみたいと言ったそうだ。友人は「絶対に会わん方がいい」と妻に答えた、教えてくれた。文章を読んで想像する私と、実際の印象がかけ離れているからだという。

先日、鮎屋へ行った。その鮎屋には10数年前から通っている。鮎屋の親父も私も不機嫌

であった。お互いに不

機嫌の空気を挟んでカウンターの座って、昔は2巻ずつ食べた。彼は私の名前を今も知らない。鮎屋の亭主と私は最悪の人間関係から出発して今も悪い状態が続いている。しかしこの頃少しの会話が成り立ち、好きな物から1巻ずつ頼むようになった。鮎屋の女房が帰り際に「お客さんは、話をすると違う人みたいですね」と言った。鮎屋の女房も私が怖かったようだ。私の妻がこの頃、「最低の男と結婚してしまった、と思ったけど、少しずつ改善している」と言っている。

何事も、最高から出発しないほうがよいようだ。



井口昭久 1943年長野県生まれ。名古屋大学医学部卒業後、同第三内科入局。愛知医科大学講師などを経て'78年ニューヨーク医科大学留学。'93年名古屋大学医学部老年科教授。名古屋大学医学部附属病院長を経て現在、愛知淑徳大学教授、名古屋大学名誉教授。『鈍行列車に乗って一医者人生ソロソロ帰り道』(風媒社)など著書多数。